

## 呂号五〇帰投せり

京都府 桑井 豊

私は京都府の北部山間地の綾部市で生まれ、父は土  
建業を営み、四男二女の兄弟の四男として育った。学  
業を終わると、当時の若者が共に進んだ、君国のため  
海軍志願兵として、昭和十七（一九四二）年五月一  
日、舞鶴海兵団に入隊した。

海兵として厳しい訓練を積み、かつ潜水艦機関兵と  
しての訓練を受け、エンジン兵として昭和十九年九  
月、潜水艦呂号五〇の乗組員として編入されることと  
なった。

潜水艦は浮上航行中はディーゼルエンジンで航行  
し、潜航中はバッテリーで運転を続ける機関として設  
計、作製されていた。同艦に勤務しておられた浜口軍  
医の日記を参考に申し述べます。

昭和十九年十一月十九日、いよいよ壮途に就くこと  
となり、本艦も初めての出撃、私もまた初陣である。

長官をはじめ各艦隊参謀が来艦され激励と訓示を受け  
る。やがて「出航用意！」のラッパが響く。墨痕鮮や  
かな「南無八幡大菩薩」の幟を付けた潜望鏡がスルス  
ルと伸びて秋風に翻る。祖国の安泰と我が帝国海軍に  
栄えあれと祈る鶴岡八幡宮のお守りを秘めた白鉢巻き  
を締めた乗員全員が各配置に就く。「両舷前進、微  
速！」徐々に僚艦から離れて行く。

どこからか「轟沈」の力強い合唱が流れ聞こえてく  
る。女子挺身隊の可憐な白鉢巻きが目にしみる。

「帽子振れ！」見送る者、見送られる者、互いに振  
る帽子。「取り舵いっばい」から艦首を港外に向けた  
本艦は徐々に速度を増していった。

夕刻、豊後水道を通過する頃から海上は荒れ模様と  
なり、比島沖まで敵に発見されない限り水上浮揚航行  
を続ける予定。祖国に栄えあれ。

呉や大竹で潜水艦や飛行機がなく、回天特攻隊員に  
回された予科練出身の紅顔の美少年の面影は忘れられ

ない思い出となる。

同年十一月二十日十時三十分、突然けたたましい緊急ベルが鳴り響く。早くも本艦は急速潜航を始め、ディーゼルから快い電気モーターのうなりに変わり、深度三〇メートル―五〇メートルと海底の静寂に変わった。司令塔より「敵潜望鏡発見！」と艦長の殺気立った声が伝わる。豊後水道を越えれば既に敵潜の警戒網に引っ掛かるのだ、油断できない。その後、感度もなく警戒が解除された。

水上航行から海面下に全没するまで二十七秒の記録を持つ猛訓練の成果が今日の実績として実った結果であろう。再び浮上航行に移って二時間ほど経った時、彼我不明の水上偵察機を発見、再び急速潜航に移る。慌しい一日であった。

私たちの出撃した十一月十九日頃は、十七日に米軍がレイテ島に上陸し、海軍の主力艦隊がレイテ沖海戦に大敗を受け、帝国海軍の水上部隊は、この海域には一隻も姿を見ない時期であって、我々潜水艦部隊のみ

で、海底から米艦隊の比島上陸を切断しようと戦っている時期であった。

十一月二十五日十一時二十分、「総員配置に就け！」潜望鏡は遂に敵機動部隊を見付けたのである。天佑か神助か、一転すれば地獄の海か。ここ比島ラモン湾の沖で、わが呂号五〇潜水艦は敵機動部隊と正面衝突したのであった。高鳴る鼓動を抑えることもできなかった。

「爆雷戦防衛！」「魚雷戦用意！」号令は次々飛ぶ。一瞬の静寂、誰一人配置から身動きもしない。「撃てー！」。時に十二時十一分。初めて聞く快調な九五式酸素魚雷は、四本続け様に突進した。一瞬静まり返って秒時計をみる。不気味な衝撃音三回、爆発音一回、その後轟然たる誘爆音が海底に響く。戦果確認のため瞬間露頂、敵の制圧爆雷が今にやってくると思うと無言のまま顔を見合わず。腋の下に冷や汗がにじみ出る。敵の駆逐艦の爆雷攻撃が迫り来ると思うと圧迫感に息が詰まりそうになる。「ドドン」と百雷一時に落ちるとき爆雷音に艦はビリビリッと震動する

が、電球が割れないところをみると至近弾でない判断したが、敵艦が次から次と頭上を通過し、どうやら本艦の位置を見付けることができないらしい。

天祐神助か爆雷攻撃は夕方まで続けられたが至近弾は一発も落とされなかった。翌日浮上してラジオのスイッチを入れると「我が潜水艦は二十五日、ルソン島東方海面において敵機動部隊を襲撃し、中型航空母艦ならびに駆逐艦各一隻撃沈せり」と。嬉しさに胸がいっぱいになる。しかし私が乗艦している潜水艦とは故郷の父母は知るや知らずや。

十二月八日、三度目の開戦記念日、破竹の勢いで太平洋を席捲した無敵帝国海軍も十月二十五日、レイテ作戦を最後としてここ比島沖にすでになく、我々潜水艦のみ。戦艦「武蔵」「扶桑」「金剛」は撃沈され、「長門」は損傷し呉へ引き揚げ、「大和」は内海に残存、空母もほとんど役に立たず、頼りは飛行機と潜水艦のみとなってしまった。出撃以来二十一日、燃料も残り少なくなってきた。不精ひげが顔中ひげだらけに

なってきた。

内地が近付いて来た。事故は気のゆるみから起こりがちだ。一人の不注意は総員を道連れに潜水艦一隻を海底から浮上できなくするのだ。我々潜水艦乗りは全員戦死か、全員の生還かのどちらかだ。一部の者のみ助かる可能性は考えられない。

豊後水道を通過、甲板に出る。一カ月目に出る外気のすがすがしさよ、祖国の懐かしさよ。

帰国後、家族と対面も終わる間もなく、一月二十三日、十本の魚雷をはじめ装備を積載し直した艦は、難局打開の戦雲と困難に向かって敢然と再出撃に向かうこととなった。悲壮な涙の再出撃の出港であった。初陣の時の華やかな出撃に比べて、二回目の今回の出撃は秘密裡のこっそり出撃である。豊後水道を出れば既に敵潜が待機しているという情報は入手している。新任務は台湾沖で決定通知された。

1 前回の出撃同様、比島東方海面における敵補給路の遮断。

2 レイテ島に近づき敵艦船の背後攻撃。

3 比島より台湾への残存パイロットの輸送。

これらは難局を暗示する下命である。

今晚の夜食はカボチャの天ぷらにトマトケチャップを塗りつけた傑作品だ、美味しい。

一月二十九日、いよいよ今日から長時間の潜航に入る。我々の作戦行動は、夜間は浮上航行し、充電しながら敵艦船を求め、昼間は潜航したまま潜望鏡を時々上げては敵艦船を待ち受けるのである。見張員以外は太陽どころか月も星も新鮮な大気にすら接することができない。我々は明けても暮れても、舷測に碎ける波濤の音のみ。今日は最初の長時間の潜航のためか十時間目で炭酸ガス四パーセントで頭痛がする。既に制空権も制海権も敵の手中にある海面に突入している航行である。

牛缶、レンコン、タケノコ、魚の缶詰を苦勞してライスカレーなどに加工しても所詮缶詰は缶詰、兵たちはサイダーやミカンなどの果物の缶詰ばかりを欲し

がって、缶詰は欲しがらない。

比島に上陸した連合軍はマニラに侵攻、激戦中との無線が入る。祖国の前途全く暗澹たるものあり。我ら回天の業の成否に関せず、海の藻屑と消えるまで戦わねばならない。

「前進微速」を続けて間もなく突然大輸送船団と思われるスクリュー音が聴音室から報告あり、護衛の駆逐艦七隻八隻、二万トン級輸送船十数隻とのこと。深度三〇、前進微速または強速で追うが、とうとう襲撃距離に迫り着くことができず残念だった。

二月十一日、皇紀二〇〇五年の紀元節の佳節の日、レイテ東方洋上にて八時、艦長の号令で佳節の遙拜式を終わった直後、八時四十分、輸送船団らしきタービン音、総員配置に就く。「爆雷戦防御」下令、「戦闘魚雷戦」の号令、「第四射法」「発射用意」「撃て！」と矢継ぎ早に号令が下る。四本の魚雷はスルスルと艦を離れ目標に向かう。

何秒経過したのか、ドシン、ダンダンと海底をゆる

がす動揺が伝わってくる。「万歳！ やった！」大声が出る。「今のは一万トン級輸送船に命中」と、艦長の声が伝声管から伝わる。

「海上はスコール、露頂したら目前に大型輸送船の横腹が見えた。距離八〇〇で発射、轟沈。駆逐艦がおるから注意しろ」と艦長の注意。冷却機等音源を一切停止、艦内通路は毛布を敷いて防音、日没を待つ。潜航十三時間、空気濁り呼吸困難。

「潜航やめっ！ 浮上用意」、さあ浮上だと生気満つ一瞬。あに凶らんや、海上では敵駆逐艦がスクリーを止めて我々の浮上を待ち構えていたのだ。敵艦の探照燈でいきなり照射を浴びてしまった。「急速潜航」、深度二一三〇メートルも潜ったところ、艦も割れんばかりのものすごい衝撃音を受けた。爆雷攻撃の第一弾だ。耐震装置の付いた電灯のカバーも木っ端みじんに破れ、艦内は一瞬真っ暗闇となる。電灯が消えてしまうと不安と恐怖が急速に覆い被さってきて声も出ない。

「電源切り換え」「電灯取り換え」と機関長の矢継

ぎ早の号令のもと我々機関兵は懸命に復旧作業が続ける。艦内の照明を回復し、艦の異常の有無の点検が行われる。その間、敵艦は数回爆雷攻撃を反復する。その都度、艦に大きく爆音の衝撃が来る。深度九〇メートルの海底で衝撃を避け潜航を続ける。聴音室の内橋伍長から「敵は一隻、あとしばらくの辛抱です」と報告。敵の爆雷も残り少ないと判断しての報告に一同元気を取り戻す。

その間、医務室の消毒用ホルマリン容器が爆雷攻撃で破損して艦内ガス発生、全員防毒マスクを着用するというトラブルを併発したりして、艦内の衝撃は甚大であった。

潜航十三時間後、〇時三〇分「潜航やめ、ただ今より浮上する。メインタンクブロー！」、さあ浮き上がれ、浮上してくれと、一心込めて神仏に念じた。モーターのうなりからディーゼルに切り替わり、ブルン、ブルンと水上航走に移った瞬間の喜びは筆舌に尽くし難い。生死の境を脱して北へ北へと戦場を離脱した。

その後、もう一度、沖繩に敵機動部隊来襲時の出撃があった。その時は呉港出港後は浮上航海はほとんどなく潜航を続け、敵機動部隊まで近迫したが、沖繩近海の敵機動部隊の艦船のおびただしさに驚いた。攻撃地点まで近道し待機を含めて四〇時間も潜航を続けたが、遂に機会を逸して戦場を離脱した。しかし潜航四〇時間、七十五人の隊員の呼吸困難も極限に達し、生き地獄の状態で脱出した。最も苦しい思い出となった。

昭和二十年五月、潜水学校高等科に進学のため大竹海兵団に移ることとなり退艦した。

今次大戦中、潜水艦は「イ号」「ロ号」合わせて二三五隻のうち二二七隻が海没、八隻のみが残った。「ロ号五〇」はその八隻の中の一隻として残留したのである。奇跡的な存在というべき潜水艦であった。

大竹海兵団の潜水学校在隊中の昭和二十年八月六日、広島駅構内の列車内で原爆の被爆を受けた。幸い車中であつたので一命は取り止めたものの原爆症認定

書付きの生涯であつた。

復員後、郷里の綾部市に帰り、建材商を営んで生計を立て、現在は息子に事業を譲って、妻と共に余生を送っている。